編集復刻版

昭和期「銃後」関係資料集成

全9巻

一ノ瀬俊也＝編・解説

アジア・太平洋戦争の時代（一九三一～四五年）、日本軍・政府と地域社会は、戦場で戦う兵士に思い残すことなく命を捧げさせるために、もうひとつの「戦場」である「銃後」をどのように慰撫し、激励し、また管理し、抑圧したのか。忘れ去られた動員のありよう、軍事援護の実態の貴重資料を呈示し、明らかにする。

働き手を失った家族、戦没兵士の遺家族、傷痍軍人、帰還兵士に対して、女性相談員や方面委員を使い、「未亡人」の就職の世話、性の管理、恩給の配分のトラブル解決、傷痍軍人の結婚、等々、あらゆる手厚いケアと精神的・物質的な支配が展開された。

同時に、前線の兵士に、郷土のための戦いを意識させるべく、慰問文集が編まれ、「後方支援」を担う役割も果たす。

女性史、軍事史、軍事教育史、戦時生活史をはじめとする近代史研究に必備の「銃後」資料六六点を厳選し復刻刊行！

のこされた女性・子ども・高齢者・障害者・帰還兵士をどう遇するか――？

戦争の遂行は、もうひとつの「戦場」である「銃後」体制の確立と維持なくしてはなしえなかった。

アジア・太平洋戦争期の軍事援護の実態を明らかにする貴重資料を厳選し、編集復刻！

◉揃定価――225,000円＋税

◉配本――全3回配本

◉推薦――吉田裕（一橋大学）
加納実紀代（女性史研究者）
成田龍一（日本女子大学）
前田一男（立教大学）

六花出版

刊行にあたって

一ノ瀬俊也

近代日本の徴兵制が、一九四五年の破局に至るまでなぜまがりなりにも存続し得たのか、という問題を考えるうえで、軍事援護――兵士やその遺家族の生活を物心両面で支えるべく採られた種々の施策の総称――は重要な手がかりの一つになると考えられます。

国家による軍事援護政策の目的は、「勇士の後顧の憂を断つ」という当時の言い回しが如実に示すように、兵士たちに従軍中、そして戦死した後の家族の心配をさせず戦争に専念させることにあったからです。

一口に軍事援護と言っても、その内容は、遺家族中の困窮者に対する生活援護から応召兵士に対する慰問・激励に至るまで実に多様であり、またそれゆえに多くの担い手により社会のさまざまな局面において実行されました。

軍事援護の全体像は巨大であり、まだまだ未解明な部分も残っています。この史料集は、援護の重要性を国民に周知させるために作られたパンフレット、地域の援護担当者向けに作られた制度の解説書、各年度の援護の実態を記した諸記録など、非売品も含めた多数の史料を一般の利用に供して研究の進展に寄与することを目指したものです。多くの方々に活用されることを願っています。

（いちのせ・としや　編者）

銃後後援強化週間のアドバルーンや店頭装飾（右）／ポスター・印刷物（厚生省『銃後後援強化週間記録』1939年（第1巻所収）より）

◉収録資料一覧

第1巻

Ⅰ　政府の軍事援護政策

一―傷痍軍人及軍人遺家族慰恤の考案（中井歩兵大佐講話の要旨）●陸軍恤兵部●一九三三・二
二―戦没将兵の遺族の為に●陸軍恤兵部●一九三三・七
三―傷痍軍人の為に●陸軍恤兵部●一九三三・一二
四―傷痍軍人及軍人遺族の為に●海軍省●一九三九・二
五―銃後後援強化週間記録●厚生省●一九三九・三
六―支那事変軍人軍属ニ関スル戸籍事務通牒回答集●野本定治●一九三九・三
七―出征軍人戸籍取扱実例●福井才一郎●一九三九・三
八―軍人遺家族傷痍軍人帰還（郷）軍人　援護大鑑●陸軍省（恩賞課長序文）●一九三九・六
九―通解軍人援護読本●松本貞水●一九四三・一
一〇―軍事保護院推薦傷痍軍人結婚物語●大日本傷痍軍人会本部●一九四三・四

第2巻

Ⅱ　各地域軍事援護の実際（1）

一一―今次事変関係軍人家族遺族扶助等に関する概況第一輯●社会局社会部●一九三七・八
一二―軍事援護事業概況第二輯●厚生省臨時軍事援護部●一九三八・一
一三―支那事変軍事援護誌第一輯●岡山県●一九三九・三
一四―支那事変軍事援護誌第二輯●岡山県●一九四〇・三

第3巻

Ⅱ　各地域軍事援護の実際（2）

一五―支那事変軍事援護誌第三輯●岡山県●一九四四・一
一六―支那事変誌（第一輯）●広島県●一九四二・九

第4巻

Ⅱ　各地域軍事援護の実際（3）

一七―支那事変銃後後援誌第一編●北海道庁●一九三八・八
一八―支那事変銃後後援誌第二編●北海道庁●一九四一・三

第5巻

Ⅱ　各地域軍事援護の実際（4）／Ⅲ　地域軍事援護の理想像

一九―支那事変銃後後援誌第三編●北海道庁●一九四三・一
二〇―満洲事変に岡山県の生んだ銃後美談第一輯●帝国在郷軍人会岡山支部●一九三三・六
二一―銃後美談抄●朝鮮総督府学務局社会教育課●一九三七・一二
二二―事変佳話●埼玉県出動将兵援護会●一九三八・六
二三―斯くて銃後の護り全し　出征将兵軍人遺家族感激譜●島根県情報部●一九三八・一一
二四―月刊東奥臨時増刊銃後青森県を語る西郡号●東奥日報社●一九三九・七
二五―月刊東奥臨時増刊銃後青森県を語る南郡号（黒石・柏木地方）●東奥日報社●一九三九・九
二六―方面委員銃後奉仕実例集●埼玉県方面事業聯盟●一九三九・一〇
二七―方面叢書第十二輯軍事援護実例（方面委員取扱）●財団法人全日本方面委員連盟●一九四〇・一
二八―銃後美談第一輯●恩賜財団軍人援護会鳥取県支部●一九四二・一〇
二九―軍事援護事業叢書第一輯遺家族の法律問題（付録　関係法規抜萃）●大阪市役所●一九四三・五

第6巻

Ⅳ　地域援護に関する諸法規

三〇―軍人遺家族後援便覧●支那事変名古屋市後援会●一九三八・六
三一―軍事援護事務提要●京都府学務部社会課●一九三八・七
三二―軍事援護事務提要第二輯●京都府学務部社会課●一九三九・三
三三―軍事扶助並援護ニ関スル執務提要●愛知県軍事援護課●一九三八・一一
三四―銃後奉公会に就て●東京市役所●（一九三九）
三五―大阪市の銃後奉公会に就いて●大阪市役所●一九三九・六
三六―神戸市軍事奉公会（昭和十四年六月末日以前）　神戸市銃後奉公会（昭和十四年七月一日以後）要覧●一九三九・六
三七―軍事援護資料第一輯　恩賜財団軍人援護会愛知県支部執務提要●恩賜財団軍人援護会愛知県支部●一九三九・八
三八―銃後奉公会に就て●静岡県軍事援護課●一九四一・四
三九―軍事援護関係規定●京都市軍事課●一九四四・四
四〇―軍人援護の根本と銃後奉公会の運営●恩賜財団軍人援護会山口県支部●一九四五・一

第7巻

Ⅴ　地域軍事援護の問題点と取り組み

四一―紀元二千六百年記念全国軍人援護事業大会報告書●軍事保護院／恩賜財団軍人援護会●（一九四〇・一〇）
四二―遺族家族指導嘱託講習会講義録●軍事保護院●一九四一・一〇
四三―遺族家族指導嘱託講習会講義録●軍事保護院●一九四三・三
四四―軍事援護功労銃後奉公会及隣組表彰記録●恩賜財団軍人援護会●一九四三・三
四五―軍事援護功労銃後奉公会表彰録●恩賜財団軍人援護会●一九四四・三

第8巻

Ⅵ　地域軍事援護担当者のマニュアル／Ⅶ　戦後の援護をめぐって

四六―傷痍軍人及軍人遺家族世話係必携●陸軍恤兵部●一九三三・六
四七―愛知県軍人遺家族世話係必携●愛知県●一九三五・七
四八―鹿児島県軍人遺家族相談所必携●鹿児島県軍人遺家族相談所●一九三九・三
四九―軍事援護相談所委員（婦人指導員）必携●岩手県／恩賜財団軍人援護会岩手県支部●一九三九・六
五〇―軍人遺、家族身上相談人必携●福島県●一九四〇・三
五一―軍人遺、家族相談人指導の手ひき●福島県●一九四二・三
五二―軍事援護ニ関スル精神指導要綱●福岡県●一九四二・七
五三―社会部報告第8号戦死戦災死者遺族調査報告●大阪市社会部●一九四六・一二
五四―戦傷病者戦没者遺族等援護法関係法規集●厚生省●一九五二・五
五五―戦傷病者戦没者遺族等援護法関係法規集（追録）●厚生省●一九五二・一〇

第9巻

Ⅷ　前線将兵への慰問誌

五六―満洲派遣将士　慰問写真帖●青森県犒軍義会●一九三二・四
五七―銃後の声●高崎市教育会●一九三二・五
五八―我等の勇士第一輯●帝国在郷軍人会金橋村分会●一九三七・一一
五九―めばえ　皇軍慰問号●相川尋常高等小学校／相川実科高等女学校●一九三八・二
六〇―福島県石城郡旧菊多方部　出征軍人慰問帖●磐城公論社●一九三八・一〇
六一―銃後の大阪　軍事援護通信第一報　東成区版●大阪市社会部軍事援護課●一九三九・五
六二―われらの勇士第六輯●大日本帝国在郷軍人会（奈良県）金橋村分会●一九三九・七
六三―銃後之浪速●大阪市浪速区役所●一九四一・五
六四―片瀬町出身将兵ニ対スル御慰問●神奈川県片瀬町銃後奉公会●一九四二・八
六五―郷土のたより第六輯●山形市銃後奉公会●一九四二・九
六六―郷土部隊慰問　銃後千葉●銃後千葉発行所●一九四三・二

推薦します

軍事援護体制の特質を浮き彫りに

吉田裕

日本近代史研究において、軍事史は、いわば特殊な研究領域だった。藤原彰・大江志乃夫・秦郁彦・大濱徹也などの先駆的な研究が存在したものの、軍事史研究そのものを、あえて極端な言い方をするならば、賤視する傾向が学界の中で強かったからである。軍事史研究を主として担ってきたのが旧軍関係者であったこと、悲惨な敗戦の結果、戦争や軍隊を忌避する政治文化が成立したことが、その背景にある。しかし、一九九〇年代頃から、こうした状況に大きな変化が生じ始める。戦争体験をまったく持たない「戦無派」世代の研究者が、軍事史研究に本格的に取り組み、次々に新しい研究成果を世に問い始めるようになったのである。こうした新しい研究潮流は、軍隊を社会史、民衆史の側からとらえ直そうとするところに大きな特徴があった。

一ノ瀬俊也氏は、まさに、この研究潮流を代表する研究者であり、軍隊関係の各種マニュアル本など、従来の研究では歴史史料としての意義をほとんど認められてこなかった文献に光をあて、軍隊や戦争を支える国家や地域社会のあり方を解明してこられた。氏はまた、軍事関係の稀覯本のコレクターとしても知られている。このたび、その一ノ瀬氏が「銃後」関係の史料集を編集された。いずれの史料も、戦争と軍隊を支えた「銃後」のありようを浮き彫りにする重要なものばかりである。この史料集の発刊を機に、アジア・太平洋戦争期の軍事援護体制の研究が一段と進展することを期待したい。

（よしだ・ゆたか　一橋大学大学院教授）

『銃後千葉』（一九四三年）

『銃後の声』（一九三二年）

「銃後」の日常を照射する資料群

加納実紀代

毎年八月一五日には、政府主催で戦没者追悼式が行われる。追悼の対象は一九三七年の日中戦争から敗戦までの死者三一〇万人。このなかには空襲などによる銃後の死者八〇万人も含まれている。銃後を巻き込む近代戦争ならではの犠牲だが、しかし銃後の被害はそれだけではなかった。戦時下の日常そのものがいかに犠牲を強いるものだったか、この資料集成は如実に示している。

戦争は当初から働き盛りの男たちを大量動員した。しかも戦争の拡大・長期化によって戦死・戦傷者は増える一方だった。当然、生計の中心を失った家族は困窮する。これを放置すればやがて怨嗟の声地に満ち、戦争の継続も危ぶまれる。そこで大々的に展開されたのが軍事援護活動だった。そのために軍事扶助法などの法律を制定し通牒等を乱発し、地域に軍事奉公会などを組織化する。方面委員や婦人会の役員を困窮者対策に走らせる。ただでさえ労働力不足・物不足で忙しいのに、それらがまた煩瑣きわまりない仕事を増やすことになる。そうした戦時下の実態が膨大な資料から浮かび上がる。

とりわけ恐ろしいのは「国民教化」、つまり戦争に非協力的な民衆対策に同じ民衆を利用していることだ。部落会・隣組など地域組織の強化、軍事講演会などの実施、映画・ポスターの利用など人々は嬉々として知恵を絞っているが、それはとりもなおさず息苦しい草の根の相互監視にほかならなかった。

戦後の「平和ボケ」といわれる憲法九条体制がいかに大切なものであるか、戦場を遠く離れた銃後の日常から明らかにしている点で、この資料集成の意義はきわめて大きい。

（かのう・みきよ　女性史研究者）

戦争を生活者の立場からとらえなおすために

成田龍一

アジア・太平洋戦争をめぐる「戦後歴史学」の柱のひとつは、戦争責任の追及であった。軍部や政治指導者の動向に着目し、戦争の国際関係論的、政治学的な関心が強かったが、綿密な実証を用いる手法は、多くの史料を発掘し、整理してきた。その範囲は、旧陸海軍や官公庁の公文書から、個人所蔵の私文書に及び、アメリカの文書館の所蔵にも目配りがなされていた。

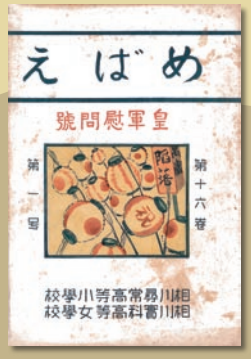
さらに一九七〇年代の「民衆史研究」の活性化は、戦時下での人びとの生活への関心を呼び起こし、人びとの生活記録、また、聞き書きなどの史料が多く集められるようになった。おりからの女性史研究の活性化のなかで、配給生活や空襲など、銃後の生活史料も収集され、地域でいかに銃後が展開し実施されたかが考察された。

さて、「現代歴史学」が主唱されるいま、「戦後歴史学」と「民衆史研究」の二つの関心の綜合化が求められている。軍部の動きを、人びとの生活の観点から把握し、人びとの生活を戦時の政策を踏まえたうえで考察すること――このことは、歴史的な想像力の新たな展開が求められるということである。また、これまで関心が向けられにくかった領域に歩を進めることでもある。

たとえば、「軍事援護」の領域はそのひとつで、近年「戦争未亡人」や「傷病兵」に対する考察が開始されていることは、こうしたことへの応答であろう。社会事業―社会福祉の領域への着目である。長い射程で、いまの福祉を考えるという問題意識にも重なっている。

こうして、あらたな戦時と戦後の関係――戦後後の射程のなかでの戦時／戦後の検証が求められるとき、「昭和期「銃後」関係資料集成」として、制度と実施、政策と生活の触れあう領域の史料が、地域史料を含みながら提供されることとなった。その応用範囲は、きわめて広い。

（なりた・りゅういち　日本女子大学教授）



『めばえ　皇軍慰問号』（一九三八年）

『われらの勇士』（一九三九年）

多角的な観点から渉猟された基礎資料

前田一男

国家総力戦は、「前線」に対する「銃後」という間接的な戦場を生み出していった。後方支援のあり方は、国内での生産戦、増産戦、経済戦、思想戦、宣伝戦、情報戦といった戦場になっていく。

このような「銃後」へのアプローチは、軍事史、都市生活史、女性史などに加え教育史においても重要な研究課題となっている。壮年男性が出征していくなかで、動員される対象が一般国民、とりわけ女性や児童生徒となっていったからだ。

「銃後」体制の確立という横断的な政策課題は、軍事援護という総合的な国策を創出させた。そのなかで、傷痍軍人や軍人遺族あるいは出征軍人家族に、さまざまな社会的援助活動をその内容とする軍人援護は、教育の分野においては軍人援護教育実践として導入されていく。文字どおり、教科教育と教科外教育とを問わず、あらゆる教育活動を軍人援護に収斂させていく教育実践である。その活動領域が地域や家庭にも拡大されたため、「銃後」を再編成する役割を国民学校が中核となって担っていこうとしたのである。その点では、学校を否定してヒットラー・ユーゲントを結成したドイツの事例とは異なるものであった。

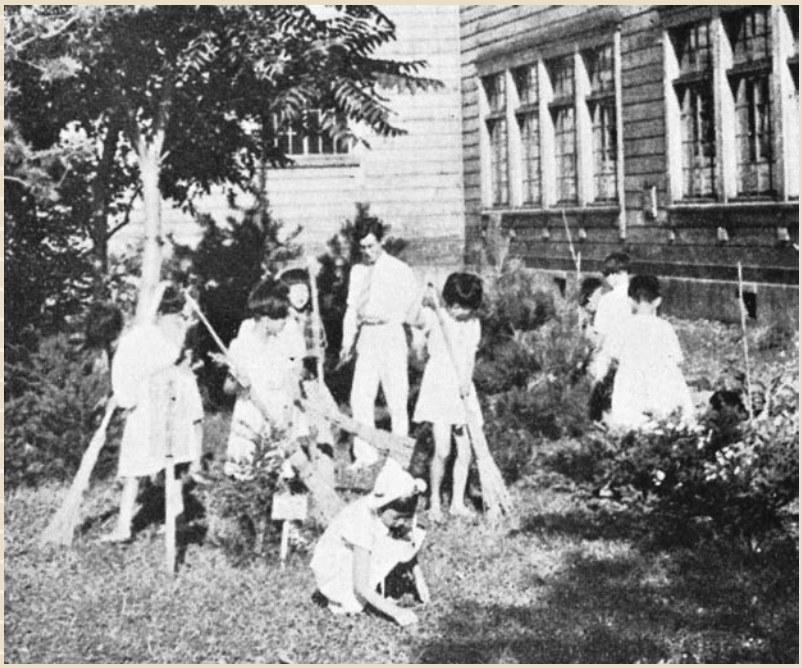
今日の政治化しつつある教育状況を考えた時、国家総力戦における「銃後」研究が各分野から改めて求められている。その意味で、政府・地域、前線・銃後、政策・実際、戦中・戦後と多角的な観点から渉猟された基礎的資料の価値は高く、適任の解説者を得た今回の出版企画の意義は大きい。

（まえだ・かずお　立教大学教授）

＊モノクロ写真は、北海道庁『支那事変銃後後援誌　第二編』1941年（第4巻所収）より

本書より

北海道庁『支那事変銃後援誌　第二編』1941年（第4巻所収）より



札幌市桑園小学校児童の勤労奉仕（出征軍人手植の記念の松の手入れ）

札幌市桑園青年団の廃品収集

札幌市銃後後援会主催の遺家族慰安会（歌舞伎劇）

札幌市立高等女学校生徒の縫製作業
（襦袢袴下作業）

編集復刻版『私設社会事業』全4巻

戦争への突入と経済不況の中、社会的弱者が増大し、同時に社会事業団体が経営難に陥った一九三一年、事態打開のため創立された全日本私設社会事業聯盟は、全国に社会事業団体の連帯を呼びかけ、法的整備を政府に訴えていく。機関誌である本誌には、日本全国及び植民地の社会事業全般に関する情報と論考が満載されている。路上生活者支援、結核や性病などの医療保護事業、農山漁村救済更生事業、「救癩」事業、母子保護事業、傷痍軍人支援事業、出獄人保護事業、少年保護事業、里子事業、養老事業など――困窮者への支援と救済に心砕いた民間の社会事業者たちの奮闘を明らかにする資料である。「聯盟」の活動をつぶさに報告する事業報告や大会議案、『罹災救助基金法改正経過概要』『私設社会事業従事員待遇調査』など関連資料もあわせて復刻刊行する。

- ●A4判／上製／総約1350ページ
- ●揃定価――100、000円＋税〈全2回配本〉
- ●解説――寺脇隆夫（元長野大学教授）
  庄司拓也（大川学園医療福祉専門学校）
- ●推薦――菊池正治（久留米大学教授）
  永岡正己（日本福祉大学教授）
- ●第1回配本　第1巻・第2巻〈2012年6月刊行〉
  ISBN978-4-905421-21-4
- ●第2回配本　第3巻・第4巻〈2012年12月刊行〉
  ISBN978-4-905421-24-5

DVD ファシズムと文化新聞『土曜日』の時代
1930年代能勢克男映像作品集

一九三〇年代日本の市民と社会・風景を切り取ったドキュメンタリー映像！　戦前文化映画を考察する上でも貴重なライブラリーがデジタル映像でよみがえる。

- ●収録内容―『土曜日』の一周年／疏水／飛んでゐる処女　ほか
- ●監修――牧野守
- ●企画構成―雨宮幸明
- ●解説――牧野守・井上史・雨宮幸明
- ●推薦――阿部マーク・ノーネス
- ●概要――DVD 2枚（計約95分）＋解説
- ●本体価格―9、800円＋税ISBN978-4-905421-27-6

編集復刻版『上毛孤児院関係資料集成』全5巻＋付録DVD 1枚

濃尾大地震による「震災孤児」の悲惨な状況に触発されて創立された上毛孤児院（群馬県）は、災害や凶作、貧窮、障害によって困窮に陥った保護者のいない子どもたちを守り育てた戦前期児童養護施設の草分けである。機関誌『孤児の友』『上毛孤児院月報』及び関係資料を網羅的に収集し編集復刻。付録に幻灯用ガラス原板の画像データ208点をDVDに収録した。

- ●B5判・A4判（第5巻のみ）・上製・約1900ページ
- ●揃定価――110、000円＋税
- ●編・解説―宇都榮子（専修大学教授）
  細谷啓介（上毛愛隣社理事長）
- ●第1回配本　第1巻～第2巻・付録DVD〈2011年12月刊行〉
  ISBN978-4-905421-09-2
- ●第2回配本　第3巻～第5巻〈2012年9月刊行〉
  ISBN978-4-905421-13-9

編集復刻版

昭和期「銃後」関係資料集成

全9巻 一ノ瀬俊也＝編・解説

刊行概要

●体裁――A4判／上製／総3、300ページ
●揃定価――225、000円＋税〈全3回配本〉
●編・解説――一ノ瀬俊也（埼玉大学）＊解説は第1巻巻頭に収録
●推薦――吉田裕（一橋大学）
加納実紀代（女性史研究者）
成田龍一（日本女子大学）
前田一男（立教大学）

第1回配本

2012年12月刊　本体75、000円＋税　ISBN978-4-905421-28-3

第1巻　●政府の軍事援護政策
第2巻　●各地域軍事援護の実際（1）
第3巻　●各地域軍事援護の実際（2）

第2回配本

2013年5月刊　本体75、000円＋税　ISBN978-4-905421-32-0

第4巻　●各地域軍事援護の実際（3）
第5巻　●各地域軍事援護の実際（4）／●地域軍事援護の理想像
第6巻　●地域援護に関する諸法規

第3回配本

2013年12月刊　本体75、000円＋税　ISBN978-4-905421-36-8

第7巻　●地域軍事援護の問題点と取り組み
第8巻　●地域軍事援護担当者のマニュアル／●戦後の援護をめぐって
第9巻　●前線将兵への慰問誌

近刊

編集復刻版

傷痍軍人関係資料集成

全7巻（予定）

戦争で障害を負った兵士はいかに遇されたのか。戦時体制が一般障害者・病者を抑圧する中で「名誉の負傷者」として厚遇された傷痍軍人に関する貴重資料を復刻し、戦争と障害の問題、国家の障害者施策、リハビリテーションのありようを今改めて検証する！

●揃定価――175、000円＋税
●編・解説――サトウタツヤ・郡司淳
●全3回配本
第1回配本＝2014年刊行予定

＊表示価格はすべて税別。

六花出版　〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-42　電話 03-3293-8787　ファクシミリ 03-3293-8788